

## アラフォー女子の自分探し

中野 理恵

冒頭、ゆったり流れる<sup>そうごん</sup>荘厳なショパンの「葬送行進曲」を背景に、布地風のハイセンスなベージュの画面にクレジットが紹介され、大河ドラマの始まりを思わせる。だが、唐突に始まった感のある本編では、飲み屋で宴会の真っ最中だった。

年長の男性が盛り上がりお酒を一気にあおり、そのまま倒れてしまう。何と、彼は死んでしまったのだ。男性は映画監督だった。すると、彼を支えていたプロデューサーのチャンシルさんに、映画会社の社長はクビを言い渡す。

アラフォーにして失職したチャンシルさんには、新たな職と収入に見合う住まい探しが待っていた。見つかった住まいは、狭い坂道を昇らなければ辿り着けない不便な場所にあり、しかも、家主は風変りな一人暮らしの高齢女性である。旧知の若い女優ソフィーに頼み込み、彼女の家の家政婦として生活費を稼げるようになるチャンシルさん。するとある日、ソフィーの留守中に、彼女にフランス語を教えているという35歳の男性がやってきた。短編映画の監督だとも加える彼に、密かに心のときめきを覚えるチャンシルさん。

そのような日々を送るチャンシルさんの前に、白いランニングシャツとパンツ姿の男性が、時折現れ、自分を、あの香港映画の大スター、今は亡きレスリー・チャンだ、と名のるではないか。わけがわからないのだが、映画が人生の唯一の〈福〉だったチャンシルさんには、どうやら、他に幾つもの〈福〉がある、との兆しが現れてきたようだ。

監督のキム・チョヒは1975年生まれで、本作で監督デビュー。チャンシルさん同様プロデューサーとして、今や、韓国映画界の重鎮の一人となったホン・サンス監督を支えてきた。チャンシルさんは彼女を投影しているのだろう。



©KIM Cho-hee All RIGHTS RESERVED/ ReallyLikeFilms

また、『東京物語』（小津安二郎監督）や、『ジプシーのとき』（エミール・クストリツァ監督）、『欲望の翼』（ウォン・カーウアイ監督）など映画史に残る傑作の題名が引用され、彼女がいかに関心があるかが画面から伝わってくるのは、映画ファンにはうれしい。そして、何よりも不条理劇風な作風はスペインのルイス・ブニュエル監督を彷彿とさせ、今後に期待できる要素であろう。釜山国際映画祭、ソウル独立映画祭等、数多くの映画祭での受賞歴や出品歴が多いのも頷ける。

映画的な斬新さにとどまらず、チャンシルさんの語る言葉は示唆に富んでいる。「好きな仕事をしていれば、満たされると思っていた。それは思い違いだ」「不足感から何かを求めても幸せにはなれない」「若い頃には何かに飢えていた」「人生を私らしく生きたくなった」等々。これらの台詞に込められているのは、45歳にして、脚本も自ら執筆し初監督作を完成させたキム監督自身が、自らに向けた言葉だったのであろう。

好きで選んだ仕事を失ったことがきっかけで、アラフォーにして自分探しを始めたチャンシルさんに、共感する女性は多いのではないだろうか。

### 《Cinema Information》

#### 『チャンシルさんには福が多いね』

韓国映画(96分)／監督:キム・チョヒ／2021年1月8日(金)よりヒュンマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』（現代書館、2018）等。